山と博物館

第43巻 第1号 1998年1月25日 大町山岳博物館

特集 企画展 鹿島槍ケ岳・爺ケ岳の自然と歴史展（長野オリンピック文化・芸術祭参加）
1月24日(土)～3月1日(日)

齊藤 清 画

企画展の開催にあたって

奥原 徳則

後立山連峰に隣あってそびえる鹿島槍ケ岳と爺ケ岳は伝統的な雪形「鶴と獅子」や「種まき爺さん」でも有名な山々です。

高名な山岳写真家、田淵行男先生の著書『雪形』によれば、安曇野から仰ぎ見る方角によってその姿は様々であり、岩と残雪がおりなす雪形もまた、それぞれに里人を見守る山の神様だった、という説もあるそうです。

安曇野の南部では、爺ケ岳の三つの峰のうち南峰直下に早ければ三月下旬に現れる黒い岩肌を「種まき爺さん」とし、かつて農事暦の一助とした由。

さらには、四月の暦も進につれて、爺さんのそばに「種をついばむ鳥」や「遅ればせながら駆けつけた婆さん」が現れるという伝承も残っています。

一方、大町では一般に南峰と中央峰の鞍部に出る岩肌を「種まき爺さん」としています。市街のごく限られた区域でしか達者な姿を見ることはできないのですが、ひとつの山に二人の爺さんがいるのも、里それぞれの個性の反映なのでしょう。

本展では「雪形イメージコンテスト」のコーナーも設けます。これは残雪の美しい鹿島槍ケ岳と爺ケ岳の写真を見ていただき、伝統や伝承にこだわらず、その場でイメージのわいた「自分の雪形」を投票していただき、会期中に逐次発表、終了後に賞を授与しようという企画です。

『新しい地方文化向上のために郷土の特殊性を生かし、私たちは北アルプスの大自然をもう一度見直さなければならない』。

昭和二十二年五月三日、新憲法施行の日に大町図書館で行われた一志茂樹先生（当時松本市立博物館長、大町出身）の講演に感激した地元青年団の熱意と奉仕的な活動が、山岳博物館創設（昭和二十六年）の原動力だったと言います。

この企画展が、ささやかながら先生の志にかない、再び何かが生まれるひとつの契機となれば幸いです。

ご高覧のほどお願い申し上げます。（山岳博物館長）

《鹿島槍ケ岳・爺ケ岳の自然と歴史展》
会 期 一月二十四日(土)～三月一日(日)
休館日 毎週月曜日、二月十二日(木)
料 金 常設展とともに通常料金

企画展「鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の自然と歴史」展

大町山岳博物館編

自然と歴史に分けて、展示コーナーごとに説明を加えてみたい。

《自　然》

爺ヶ岳のライチョウ

―大町山岳博物館の調査の歴史とその成果―

爺ヶ岳のライチョウを対象に調査、研究された事実は数多く記録され、爺ヶ岳は日本におけるライチョウ生態解明の地ともいえる。

昭和三六年には大町山岳博物館の職員や信州大学教育学部などで構成された北アルプス動物生態研究グループによって五月から一〇月まで、一五〇日間連続してライチョウの調査が行われた。

昭和三八年三月から四月まで四〇日間は冬期の調査が行われ、この調査では種池山荘を基地として通信関係の支援に陸上自衛隊松本駐屯地の隊員が参加し、入山時、途中の食料の荷上げ、下山時には大町山の会による支援を受けた。

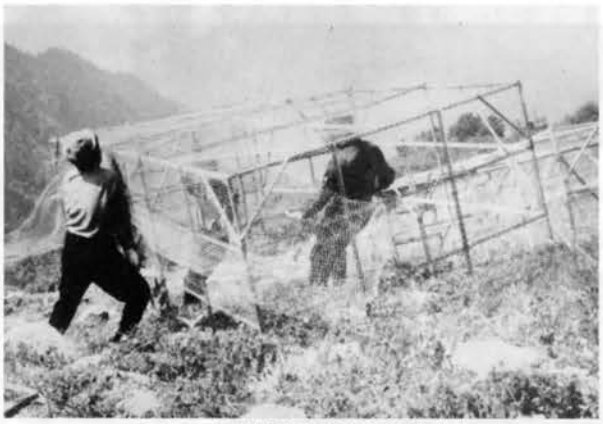
昭和37年　冬期ライチョウ調査

昭和三九年七月から八月には移動禽舎を設置して親一、雛三羽を収容して家族群の生活状況、天敵との関係について調査が行われた。

また、一〇月には秋のライチョウの生活調査が実施された。

これらの調査研究成果は「雷鳥の生活」という本にまとめられ、それまで神秘の鳥として多くの謎に包まれていたライチョウが世の人々に知られることになった。

昭和四一年、文化財保護委員会、長野県、静岡県、山梨県が協力して雷鳥の生態映画を製作することになり、爺ヶ岳を中心に四月から翌年二月まで撮影が行われた。昭和四二年三月に映画「特別天然記念物ライチョウ」が完成し、同年開催されたアジア映画祭ではグランプリを受賞した。



ライチョウ現地保護飼育移動禽舎の作業

このように生息現地でのライチョウの生態を解明する一方で、飼育しなければ解明できない生理、病理、遺伝などの基礎的研究を進めることで、ライチョウの持つ特性を究明し、種を保存する上でのデータを集積できるという考えで、昭和三八年から大町山岳博物館のライチョウ飼育施設で飼育、増殖の事業が進められている。

昭和五三年に爺ヶ岳で採卵し、大町山岳博物館の施設で成長した個体は玄孫（やしゃご）の誕生まで世代を交代させた。

平成三年、大町山岳博物館は四〇周年を迎え、これを記念して発行された「ライチョウ―生活と飼育への挑戦―」は爺ヶ岳と大町山岳博物館のライチョウのドラマである。

鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の植物

日本の山岳地域を代表する北アルプス。その麓に広がる大町市は最低標高地点がおおよそ六三〇m、最高標高地点が三一八〇mと地形の起伏に富んでいる。

一般的に標高が高くなるにつれ気温は低下し、それに応じて土地的条件にもよるが、発達する植生や植物も異なってくる。

それでは、鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の場合はどうなのか、山地帯、亜高山帯、高山帯に分けて柏原新道から観察してみたい。

――山地帯――

柏原新道登山口は標高一三五〇m。気候的には山地帯ということになる。

すでに新緑に色づいたブナやミズナラの林床ではオオカメノキが咲き、夏はエゾアジサイ、秋は黄や赤に色づいた紅葉が見られるなど、四季の変化に富んでいる。

――亜高山帯――

標高一五五〇m。コメツガなどの針葉樹林がグルリと辺りを取り囲み、オオシラビソ林へと続く林床にはゴゼンタチバナやミツバオウレンがよく目立つ。

ダケカンバが現れ始める標高一八〇〇mからは垂直に立つ樹の数が減る。根元ちかくから一定の方向へ曲がる樹形からは、冬の多雪がうかがえる。

――高山帯――

高山帯は環境の条件によって、いろいろな植生がモザイク状に見られる場所である。

高山帯を象徴するハイマツの群落は土壌が安定し、なおかつ消雪が早い場所に見られる。さらに消雪が遅い場所では、アオノツガザクラやチングルマを含む群落が現れ、強風で、冬は積雪が吹き飛ばされる場所では、ウラシマツツジやミネズオウを主とした群落がカーペット状に広がる。

このような植生は高山帯の代表的な植生であり、爺ヶ岳はまさにオススメの教科書である。

――鹿島槍ヶ岳――

冷池山荘からテント場を経て布引山へ。夏のお花畑には、シナノキンバイやクルマユリ、クロトウヒレンが咲き誇る。

鹿島槍ケ岳（右）と爺ケ岳

鹿島槍ヶ岳までは尾根づたいに上り、夏であれば登山道脇のシコタンソウやシナノナデシコが声援を送ってくれることだろう。

このコーナーでは鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳で、最も普通に見られる植物や植生を中心に紹介する。

鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の動物・昆虫

鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳には、特別天然記念物に指定されているニホンカモシカ、天然記念物のイヌワシ（北アルプスにおける食物連鎖では頂点に立つ肉食動物）、長野県指定の天然記念物のホンドオコジョやヤマネをはじめ、本州で最も大型の哺乳動物であるツキノワグマも生息している。

これらの動物たちの生息を支えているのは険しい山岳地形による人間との隔離と、山地帯のクリや亜高山帯下部まで見られるミズナラ・ブナといった植物に頼るところが大きいと考えられる。

山麓から山頂までの標高（山を横から見た状態）の違いによる動物の分布については、常設展示（二階）の「山地帯から高山帯までの生物」のコーナーに展示してあるので、ここでは、上空から見た状態で尾根筋と谷間にどんな動物が生息しているのかを展示する。

ニホンカモシカに触ったことのある方はほとんどいないのではないだろうか。そこで触れることができるニホンカモシカの剝製を展示する。毛の質、生え方、密度を実際に触り、高山でも生活できる秘密を知っていただきたい。

チョウ類の生息も前記の動物たちと同じく植物の分布と密接な関係がある。これは蝶の幼虫の餌となる食草の有無と植生環境によるところが大きい。

また、蝶類は変温動物であるので気候要因も大きく関与してくる。たとえ食草があっても高山蝶が鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳など山頂部の冷涼な気候でしか生息できないことや、南方の島々にいる色鮮やかな蝶が日本の高山で生息していないことは、それぞれの種が生まれた当時の場所の気候に起因しているところが大きい。

鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳の山地帯にはヒメギフチョウ、亜高山帯より上部にはクモマベニヒカゲ、高山帯にはタカネヒカゲといった様に分布している。

ここで特筆すべきものは、クモマツマキチョウであろう。この蝶は、一九一〇年七月一八日に中村清太郎により爺ヶ岳の西方の棒小屋沢乗越（二四六〇m）で日本で初めて発見された。本種は本州中部地方の山地のみに分布し、三〇〇〇m近くのお花畑で見ることができることから、高山蝶の一つにも数えられている。しかし、一般に一〇〇〇mから一五〇〇mの山麓の渓流沿いの荒地に多い。

このコーナーでは、大町市在住の山崎一彦氏所蔵の高山蝶の標本と、田淵行男記念館の協力により、同館所蔵の田淵行男が描いたヒメギフチョウなどの彩色画七点を展示する。

柏原新道より針ノ木岳を望む

《歴　史》

古絵図に見る山名の変遷

日本の山々の現在の一般呼称は、明治末から大正にかけて発行された陸地測量部の五万分の一地形図に記された山名に負うところが大きい。しかし山には大概、方角や仰ぐ姿、植生や歴史、信仰など様々な要素を反映した地方地方の名があるもので、鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳もその例外ではなく、大変興味深い。

鹿島槍ヶ岳の場合、江戸時代の加賀藩黒部奥山廻り役が、立山の真後ろということで、この一山のみを「後立山」としたり、朝夕立山とこの山の影が交互にあたることから「ミカゲガ岳」（御影ヶ岳）**とも呼ばれていた。**

一方信州側には様々な呼称があったようだ。春先に現われる鶴と獅子の雪形に因んでの「鶴ヶ岳（＝嶽、以下同様）」や「獅子ヶ岳」、双耳峰の姿ゆえの「背くらべ」、吊り尾根ゆえの「乗鞍嶽」、大町組絵図（元禄一一年製、当館にも写真を常設展示）に見る「ケンノウ嶽」などで、「鹿島槍ヶ岳」という呼称も鹿島集落の氏子が祀る鹿島神社に因んだ一地方名であったことに変わりはない。

「爺ヶ岳」の名は信州側で見える種まき爺さんの雪形に由来することで有名だが、大町組絵図には「コロク嶽」とある。これは「五六岳」の意で、三つの峰のうち北峰を五岳、中央峰を六岳、南峰を爺ヶ岳と呼んでいたからだという。だとすると布引山が「四岳」、鹿島槍ヶ岳が「三岳」……、岩小屋沢岳が「七岳」……などと呼ばれていたことがあったのか、番号は誰が何の目的で付けたのかなど、興味深い。大町に残る安政年間以前に描かれた別の絵図（伊藤憲泰氏蔵）には、北峰が「ケンヨウ嶽」、中央峰が「ゴロク嶽」、南峰が「祖父ヶ嶽」と記されてもいる。

なお越中では江戸期、「栂山」、「栂谷峯」などと呼ばれていたことが絵図の記載で明らかとなっている。

このコーナーは非常に個性的な「奥山廻り絵図」（富山県立図書館蔵）を中心に伊藤家の絵図なども加えて展開する。

鹿島槍ヶ岳と鹿島集落

カクネ里……。この独得の響きを持つ谷の地名を、平家落人伝説における「隠れ里」の意とともに知る人は多い。

鹿島集落は鹿島川流域最奥の集落であり、源氏の追っ手を逃れカクネ里に暮らした平氏がやがて下り住んだところだと言われている。集落は古来より一一戸を保っている。

鹿島の人々が祀る神社が、集落から五百メートル上流にある鹿島神社である。

「当神社の創立は不詳であるが、口伝によると、大同二年（八〇七）「たひら川」（現在の鹿嶋川）が氾濫し、里人が天地の保護神と

種池と種池山荘

して、常陸国鹿嶋神宮の分霊を奉じて勧請し、あわせて神宮に型どり、丑寅に息柄神社、辰巳の方角に鹿嶋神社を祀った。鹿嶋神の神徳が広大であるため、里人は集落を鹿嶋と称し、たひら川を鹿嶋川、鶴ヶ岳を鹿嶋槍ヶ岳と改称した。（中略）

弘化四年（一八四七）旧三月二四日県内外に大地震があり、各地に大災害があったが、当神社氏子区域には少しも災害なく、平静であった。神徳の偉大なことが顕現され、参拝者が絶えなかったという。大正七年一一月の大町地震のときも当神社氏子は平素と変わらず、それにより一般崇敬者の参拝も多く、地方参講社を設け、神徳報謝の誠を効している。」（『大北地方の神社と文化』　一九九二大北神社誌編纂委員会編より）

このコーナーは、鹿島の山と集落の関係を写真を中心に解説する。

鈴ケ岳南峰

布引山頂上より鹿島槍

登行帳と鹿島山荘

昭和五年一二月、立教大の堀田弥一らが、厳冬期初登頂を果たし、先鋭な大学、高専山岳部の注目を集め「鹿島槍の北壁、奥壁時代」と呼ばれる雪と岩の開拓期を迎えた。

「鹿島槍へは大町から傾斜の緩い平坦な道を歩いて十二キロ。十一軒の農家がひっそりと佇まう鹿島集落を根拠地にして登られた。ここの狩野久太郎、治喜衛（きくの夫人）親子の家が宿となり、立ち寄る人たちは、温かく迎えられてゆき届いた親切をうけた。

昭和五年、大町の名案内者桜井一雄は狩野家に、記念帳を備えることを勧め、登山記念帳『登高』が生まれた。

最初の記帳者は後日、日本初のヒマラヤ遠征でナンダ・コット（六八六七米）の初登頂の快挙を果たした立教大隊長・堀田弥一である。以来記念帳には、錚錚たる登山家が名前を連ね、深い思いを寄せており、わが国登山史上貴重なものとなった。」（「鹿島・狩野家『登高』の人達」　丸山彰　一九九三　『山と博物館』より）

登山家に「鹿島のおばば」と親しまれ、慕われた狩野きくのさんと、登高帳数冊（狩野家寄託）は常設展で紹介しているが、さらにこの企画展では、初期の重要な頁を実物で紹介するほか、昭和六年から三〇年までの全冊のコピーを自由にご覧いただける。

鹿島槍ヶ岳の雪と岩の開拓史

鹿島槍にはすっきりとした岩場が少ないこともあり、バリエーションルートの登攀は厳冬期から残雪期に人気が集中している。厳冬期には、アンサウンド（不安定）な岸壁と急峻な草付きと藪の斜面が一変し、ヒマラヤ襞に覆われた雪壁、壮絶な大氷壁へと魅力的に変貌するからでもある。

バリエーションルートの開拓は、大正一五年に爺ヶ岳東尾根から積雪期に初登頂されて以来、積雪期だけ見ても昭和八年に天狗尾根、一一年に北壁主稜、一二年荒沢北稜、一四年北壁右ルンゼ、一六年荒沢南稜と続き、無雪期においては昭和六年に北壁主稜、一〇年正面尾根・洞窟尾根・荒沢北稜・南稜、一一年中央ルンゼというように、鹿島槍ヶ岳では昭和初期に急速にアルピニズムが進展した。

残された厳冬期の難ルート、北壁中央ルンゼ・正面ルンゼが昭和三八年に、荒沢奥壁ダイレクトルンゼも昭和五四年に登られ、古典的ルートの初登攀争いはここに終了したのである。

このコーナーでは、バリエーションルートを概説するとともに、いくつかの初登攀の記録を、写真や使用装備で紹介する。

山小屋の歴史

ここでは、冷池山荘、種池山荘の歴史を写真で綴る。

この他、各地から撮影した鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳を写真で紹介する「**イキな横顔**」のコーナーや、鹿島槍ヶ岳の鶴と獅子、爺ヶ岳の種まき爺さんの紹介とともに、展示した残雪期の両山の写真を見た皆様に自分だけの雪形をイメージ投票していただく、「**雪形イメージコンテスト**」のコーナー（期間中に逐次発表、終了後作品の一部を公表するとともに賞を授与する予定）がある。

また「**登ってみよう**」のコーナーで、詳しく登山コースをガイドする。

（学芸員・宮野典夫、岑村隆、清水博文
千葉悟志　嘱託員・丸山善康）

鹿島槍南峰頂上より剣岳

山と博物館第43巻第1号
一九九八年一月二十五日発行
発行　〒398長野県大町市大字大町八〇五六―一
大町山岳博物館
TEL〇二六一―二二―〇二一一
印刷　大糸タイムス印刷部
年額　一,五〇〇円（送料共）（切手不可）
定価　郵便振替口座番号〇五四〇―七―一三九三